心をみつめる

第その二十八

北九州市内・近郊の寺院の僧侶にお言葉をいただくコーナーです。老後を心豊かに生きるためのヒントとなりますように・・・。

人生遍路

山道を登りもう頂上かと思えばまた坂が続くつづら折、どこまで続くかわからない海岸線…

四国八十八ヶ所は弘法大師空海が、故郷・讃岐（香川県）をはじめ若き日に修行を重ねた四国の山野に開いた霊場です。平安時代後期の今様（※歌謡）には「我等の修行せしやうは、忍辱袈裟をば肩に掛け、また笈を負ひ、衣は何時となく潮垂れて、四国の辺地をぞ常に踏む」（『梁塵秘抄』）とあり、この頃から海水でずぶ濡れになりながら四国の海岸を巡る修行が存在していたことがわかります。

四国を巡礼するお遍路さんは「同行二人（※どんな時でも弘法大師と共に歩む）の境地で、或る日は険しい山を登り、或る日は里の春夏秋冬を感じながら歩きます。

お遍路の　誰もが持てる　不仕合

森白象

これは高野山金剛峯寺座主であり、高浜虚子門下の俳人としても著名であった森寛紹師（俳号白象・一八九九－一九九四）の俳句です。白象師が子どもを失い、その遺骨を抱いて四国遍路に出た際の句で、行き交うお遍路さんと自らの気持ちを重ねながら、人間誰しも幸せな事ばかりではない、色々な不幸を抱いて遍路道を一歩一歩歩んでいるのだという心が伺えます。

遍路道を歩んでいると人生と重なります。晴れの日ばかりではない、雨の日、風の日もある。平地だけではない、上り坂、下り坂もある。それでもたどり着いた札所から見える風景が、同行のお遍路さんや地元の方々との不思議なご縁とおせったいが、私たちの心を癒してくれます。四国遍路を歩くと、「今思えばあの親切な人はお大師さんだったのではないか？」と思うことが必ず有るといいます。白象師の俳句の「お遍路」は「人生」と読み替えても良いかもしれません。

だからこそ「同行二人」、重い荷物を心のお大師さん（これは読者それぞれの信じるものや大切な人と置き換えられます）にも持ってもらう心で生きていくことが、私たちの人生をより豊かにするのではないでしょうか。

三年前、大学時代より親しくしていた後輩が三十五年の短い人生を終えました。「劇症型心筋炎」という風邪の症状から数日で命を奪われる病魔でした。訃報を聞くとまさかの思いに目の前が真っ暗になり、京都への新幹線の中で彼との思い出が浮かんできては涙を流す、そんな悲しい別れでした。この悲しみから抜け出すことはできないのではないかとさえ思いました。

確かに亡き人を想う気持ちは無くなるものではありません。しかし私たちは悲しい気持ちだけを抱えて人生遍路を歩むわけにはいきません。悲しみを心のお大師さんに持ってもらい、前を向いて歩くことも先だった方の供養でもあります。

忘却も　供養の一つ　秋彼岸

森白象

高野山真言宗 遍照院 副住職

田中 本泰 さん

「朝日カルチャーセンター北九州教室で『仏像に学ぶ』講座を担当しています」

高野山真言宗　遍照院

小倉北区上到津 3 丁目 10-15

093-651-1172